小さな夜が明ける頃

原案・山口晃平　脚本・窪川ひより

サヨコ
モリシタ
シホ
オカザキ
スミレ
ミサト
サクラ
男

1回目の前説後。男、舞台上に本を置きに来る。サヨコが来て、本を読み出す。やがて、寝てしまう。暗転後、去る。

明転。中央スポット。モリシタ、サクラ出てくる。

モリシタ　『僕は、2人で生きられればそれでいい。ジュリエットと、2人で生きていきたいんだ。』

サクラ　『それじゃあ、みんなの知ってるロミオとジュリエットのお話はなくなっちゃうってこと?』

モリシタ　『頼む。もう、嫌なんだ、死んでしまうのは。彼女と生きる道を、一緒に探してくれないか?』

サクラ　『別にいいけど、私はどうすれば良いの?』

モリシタ　『君に、ジュリエットの代わりを演じて欲しいんだ』

サクラ　『・・・わたしが、ジュリエット?』

モリシタ　『そう。君はジュリエットに、よく似ている。これならきっと、誰にも気付かれないはずだ。君ならきっと、この物語を変えられる。』

ミサト　はい、そこまで

明転。ミサト、シホ、オカザキ、スミレ来る。

ミサト　よし、じゃあ今日はここまで。いよいよ本番まであと1週間です!みんな、頑張ろうね!あ、外、雨降ってるから気を付けて帰ってね!お疲れー

オカザキ　スミレ、買い物つきあってくれね？
スミレ　あ、見たい番組あるからパス。お先に失礼しまーす
ミサト　オカザキ、何買うの？
オカザキ　洋服です。昨日いいの見つけたんですよ
シホ　私、一緒に行こうかな
ミサト　じゃあ私も！モリシタくんとサクラちゃんは、どうする？
サクラ　あ、今日はちょっと。すみません
モリシタ　ごめん、俺も早く帰らないと
オカザキ　わかりました！また今度行きましょう
サクラ　・・・うん、そうだね
ミサト　じゃあ、明日ね

オカザキ、ミサト、シホ、モリシタ、去る。

サクラ　海の中を自由に泳ぎ回る人魚姫。綺麗なドレスで王子様と踊る、シンデレラ。わたしも、おとぎ話の主人公になりたかった。きらきらしてて、素敵な世界の住人になりたかった。でも、どんなに頑張っても私は、そこには行けなかった。大人になった今でも、私は。

雨の音。上手から傘を差したモリシタが来て、サクラを傘に入れる。
少し言い争う。サクラ、悲しそうな表情をして、下手に走り去る。
上手からサヨコが傘をさして、出てくる。

サヨコ　あれ、モリシタさん
モリシタ　・・・サヨコちゃん
サヨコ　どうしたんですか？
モリシタ　・・・君に、頼みたいことがあるんだけど
サヨコ　え、わたしに？
モリシタ　そうだな、明日、空いてるかな
サヨコ　多分・・・大丈夫ですけど
モリシタ　それじゃあ、１３時にここで。そこで詳しく話す。じゃあ、おやすみ。
サヨコ　あ、おやすみなさい

モリシタ、去る。サヨコ、見送ってから去る。
オカザキ、スミレ、シホ、ミサト出てくる。明転。

オカザキ　りんご
ミサト　ゴリラ
スミレ　らっぱ
シホ　パセリ
オカザキ　りんごジュース
ミサト　スイカ
スミレ　かき
シホ　きゅうり
オカザキ　リンゴゼリー
ミサト　いし
スミレ　しらす
シホ　スリ
オカザキ　り、りんごパイ
ミサト　さっきからオカザキずるい！！！りんごばっかじゃん！！！
オカザキ　いいじゃないですか！！！こないだミサトさんだってオレンジジュースだのなんだの言ってたじゃないですか！！！てかそもそもシホさんがずるいんですよ！！！
スミレ　女性に罪をなすりつけるの、よくない
シホ　そうよ。スミレの言うとおり。わたしなんも悪くないもん。『り』攻めは立派な戦法ですー
ミサト　そーだそーだ
オカザキ　くそ・・・女子が多いと男子は弱くなるこの風潮誰かなんとかして！！
ミサト　さて続きね
オカザキ　はい
ミサト　イカの塩辛
スミレ　落書き
シホ　霧
オカザキ　やっぱり『り』じゃねーか！！！
シホ　だから戦法だっていってんじゃん！
オカザキ　もーやめましょ、多分お客さんにもただのすっげー暇な人たちって思われてますよこれ
スミレ　事実だし仕方ないじゃん。モリシタさんが戻ってくるまで待ってろってあ！
ミサト　え、なんですか？
オカザキ　ＤＶＤツタヤに返すの忘れてた！あ！うそ！返してた！
ミサト　ほんとなんなんあんた

モリシタ　ただいま
スミレ　あ、お帰りなさい！
サヨコ　失礼します
ミサト　おお！その子？
シホ　いいんじゃない？
オカザキ　美人さんですね！
スミレ　うん、いいと思う、衣装とかも多分オッケー
モリシタ　良かった
サヨコ　あの・・・？
ミサト　はいこれ台本！まあちょっと台詞は多いけど、なんとかなると思うから。あ、それと・・・
サヨコ　ちょ、ちょっと待ってください。なんの話ですか？
シホ　何って・・・ちょっとモリシタくん、何も話してないの？
モリシタ　連れてきてから話そうと思って
シホ　はあ？普通話してから連れてくるでしょ？
モリシタ　でも、イメージ合わないって言われたら困るだろ
シホ　イメージって、あんたが言うから・・・
スミレ　はーいはい、そこまでです
オカザキ　ほらほらシホさん、そんなに怒らないで
サヨコ　えっと・・・
モリシタ　サヨコちゃん、君に頼みたいことなんだけど
サヨコ　はい
モリシタ　舞台の主演を、君にお願いしたい
サヨコ　・・・はい？
モリシタ　頼む。君しかいないんだ
サヨコ　話が、飲み込めないんですけど
ミサト　だから、主演やって欲しいの！1週間後の公演で！
サヨコ　あ、無理です
ミサト　そんなこと言わないでええええ、お願いしますううう
サヨコ　だって1週間前しかないって・・・ていうかそもそも、今まで主演はいなかったんですか？
モリシタ　いたよ。昨日まで
サヨコ　・・・どういうことですか？
モリシタ　元々主演をやる予定だった子が、消えたんだ。
サヨコ　消えた？
シホ　いなくなっちゃったのよ。携帯の電源も切ってるみたいで、連絡がつかなく

なっちゃったの。

サヨコ　どうして？

シホ　分かんない。別に昨日もいつもとかわらなかったし

モリシタ　困っていたところで、昨日君と会ったんだ。ぴったりなんだよ、主人公のイメージに。頼む

サヨコ　・・・そんなこと言われても

ミサト　頼むよ、君しかいないんだよ・・・えっと、サヨコちゃんであってる・・・よね？

サヨコ　君しかって言うなら名前くらい覚えなさいよ

オカザキ　お願いします、俺たちほんとに困ってるんですよ

シホ　お願い。私達を、助けて

スミレ　今ならセットで携帯クリーナープレゼントキャンペーンやってます

サヨコ　えー・・・

モリシタ　サヨコちゃん、大丈夫。俺たちもできる限りサポートするから。頼む。君しかいないんだ

サヨコ　・・・そこまで言うなら

モリシタ　・・・ありがとう！

ミサト　やった！これからよろしくね！

シホ　ありがとう、サヨコちゃん

スミレ　よろしく。

オカザキ　よろしくです！

サヨコ　あ、えっと、どこまでできるか分かりませんが、頑張ります

ミサト　よーしそれじゃ、ざっくりストーリーを説明するね。このお話は、主人公の女の子が、おとぎ話の世界に迷い込んじゃう話なの。現実世界で絵本を開く度に、その童話のストーリーが始まるんだけど・・・登場人物達は、それがもう嫌になっちゃってるんだよね

サヨコ　どうしてですか？

ミサト　毎日毎日同じことの繰り返しをしてるからだよ。人間はそれでいいかもしれないけど、彼らはもうそれに嫌気がさしちゃってるわけ。登場人物達は、物語を変えてくれる人を夢見てるんだ

サヨコ　自分たちでは変えられないんですか？

ミサト　うん。あくまで彼らは作られたキャラクターだからね。その物語のシナリオを追うことしか出来ない。物語を変えるには、登場人物じゃ無い、誰かの力が必要なんだ。その役目を、主人公にお願いするってわけ

サヨコ　なるほど、分かりました

ミサト　とりあえず、読んでみようか。最初の語りからお願いできる？

サヨコ　やってみます
ミサト　よーし、じゃあ早速だけど、いきます

サヨコ、中央へ。

サヨコ　『海の中を自由に泳ぎ回る人魚姫。綺麗なドレスで王子様と踊る、シンデレラ。わたしも、おとぎ話の主人公になりたかった。きらきらしてて、素敵な世界の住人になりたかった。でも、どんなに頑張っても私は、そこには行けなかった。大人になった今でも、私は。』

後ろからモリシタが来る。
２人、話す。モリシタが話をやめ、去る。
悲しそうにサヨコがそれを見つめた後、暗転。
サヨコが横になる。明転。

サヨコ　『・・・あれ、ここは』
オカザキ　『あ、気がつかれました？』
サヨコ　『あなたは？』
オカザキ　『私は案内人。この世界であなたの手助けを致します。』
サヨコ　『この世界・・・って、ここ、どこ？』
オカザキ　『ここは、おとぎ話の世界。今からあなたには、おとぎの国を救っていただきます』
サヨコ　『はい？』
オカザキ　『あなたは、絵本を読んだことがありますか？』
サヨコ　『え、ええ。小さい頃から、気に入っているものは今でも何度も読み返します』
オカザキ　『そこです。』
サヨコ　『え？』
オカザキ　『あなたたちが繰り返し読むせいで、物語は終わっても、また繰り返さなくてはいけなくなってしまっているのです。彼らはそんな繰り返しの生活がもう、嫌になってしまっているのです。』
サヨコ　『はあ・・・？』
オカザキ　『あなたにお願いしたいのは、その物語の登場人物達を救うこと。即ち、あなたの手で、エンディングを変えること。二度と、同じ物語が繰り返さないように。』
サヨコ　『・・・よく分かんないんだけど』

オカザキ　『とりあえず、最初の物語の主人公に会っていただきます。着いてきてください』
サヨコ　『あ、ちょっと！』

オカザキが上手に去る。サヨコもそれを慌てて追う。
明転。サヨコが台本を読んでいる。ミサトが来る。

ミサト　あ、お疲れ様
サヨコ　お疲れ様です
ミサト　どうだった、初日
サヨコ　久々で、ついて行くのに大変でしたけど、楽しかったです
ミサト　良かった。楽しいって思ってもらえて。
サヨコ　昔から、おとぎ話とか結構好きだったんです。今はもう、読まなくなっちゃいましたけど
ミサト　そうなんだ。ていうか、演劇経験者？
サヨコ　まあ、一応ちょっとだけかじってました
ミサト　そうだったんだ。あ、それにしてもごめんね、直前でお願いしちゃって
サヨコ　あー、まあ・・・
ミサト　サクラがいなくなったって分かった時、モリシタくんがサヨコちゃんのこと、思い出したんだって
サヨコ　・・・サクラ？
ミサト　あ、サクラってのは、いなくなっちゃった子の名前。水川さくら
サヨコ　綺麗な名前、ですね
ミサト　そうだね、あの子にぴったりだった。うーん、サヨコちゃんて、すごくどこか・・・サクラに似てるんだよね
サヨコ　そうなんですか？
ミサト　うん、あ、サクラもおとぎ話、好きだったんだよ。主役は当て書きで、サクラが似合うように書いたから、似てるサヨコちゃんにやってもらえて嬉しい。・・・あれ？
サヨコ　どうしたんですか？
ミサト　あ、ううん、なんでもない。・・・あ、そうだサヨコちゃん、焼き鳥、好き？
サヨコ　え、好きです
ミサト　よし、じゃあ飲みに行こ！
サヨコ　え、でも明日の稽古は・・・
ミサト　大丈夫大丈夫！日付変わる前にやめれば明日には響かなーい！
サヨコ　あ、ちょ、ちょっと！

ミサト、サヨコを無理矢理引っ張って去る。
暗転。
サクラ板付き、明転後、上手から男来る。

サクラ　・・・あれ、ここは
男　あ、気がついた？
サクラ　夢を、見ていたわ
男　どんな？
サクラ　この世界から、私たちが消える夢。最後にはなにも無くなって、真っ暗になるの。スポットライトも、綺麗な衣装も、全部なくなっちゃうの。
男　あながち、夢でも無いかもよ
サクラ　嫌。そんなこと、絶対にさせないわ
男　・・・それじゃ、行こうか

男、サクラ上手に去る。
シホ出てくる。アップ始める。話しながらスミレとオカザキ入ってくる。

スミレ　だからさっきからいってんじゃん
オカザキ　いや、絶対にそれはない
スミレ　ありえない。日本人としてどうなの
シホ　おはよう
オカザキ　あ、おはようございます
スミレ　聞いてくださいよシホさん。オカザキが
オカザキ　いや、絶対に俺は正しい
スミレ　日本人なら絶対こっちだって！
シホ　何があったの？
オカザキ　シホさんはきのこ派ですよね！？
スミレ　絶対たけのこですよね？
シホ　いや・・・アルフォート

モリシタ入ってくる。

モリシタ　おはよう
オカザキ　あ、モリシタさんはどっちですか！
モリシタ　何が？

スミレ　絶対にたけのこですよね？
モリシタ　うーん、たけのこ
オカザキ　はあ！？

サヨコ、出てくる。

サヨコ　おはようございます
シホ　おはよう、サヨコちゃん
オカザキ　はよっす！
スミレ　おはよ
モリシタ　おはよう
サヨコ　あれ、ミサトさんは？
シホ　まだ来てないの。もう、いっつも遅刻するのよね
サヨコ　昨日飲み屋では大丈夫だって言ってたんですけど・・・
オカザキ　え、ミサトさんと飲みに行ったの？
サヨコ　え、うん、行っ・・・きました
オカザキ　タメでいいよ。俺とサヨコちゃん、同級生らしいし
スミレ　わたしもー
サヨコ　え、そうなの？
オカザキ　そそそ。俺ら３人最年少チーム！
スミレ　ポーズはやらんぞ
オカザキ　悲しい
サヨコ　あはは
オカザキ　それにしてもミサトさんずりいわー、俺だってサヨコちゃんと仲良くなりたいのに！

サヨコ　まあ、昨日はわりと無理矢理連れていかれたというか・・・
シホ　ミサト、そんな強くないくせに飲みたがるのよね。公演前なんだから控えて欲しいんだけど

スミレ　サヨコちゃんは？強いの？
サヨコ　うーん、普通だと思いますけど・・・
ミサト　おはよ・・・う
シホ　うわ、大丈夫！？
ミサト　昨日・・・飲み過ぎた・・・ちょっと寝かせて
モリシタ　公演直前なのにお前なにやってんだよ
ミサト　だいじょぶだいじょぶ・・・１０分寝たら元気になる、おやすみ
シホ　永遠に寝てろ

スミレ　・・・どうする？何する？しりとり？
オカザキ　しりとり好きすぎだろ
シホ　もっと有意義なことやろうよ。あ、そうだ
モリシタ　何だ？
シホ　せっかくだから、サヨコちゃんにいろいろ聞いてみない？
オカザキ　あ、いいですね！まだ全然、サヨコちゃんのこと知らないし。
スミレ　賛成
シホ　じゃあ、最初の質問。そうね・・・いつから演劇やってるの？
サヨコ　高校生の時から、大学3年まで。就職してからはやめちゃいました。
スミレ　お仕事、どんなことしてるの？
サヨコ　そうですね、うーん・・・なんて言えば良いかな。デスクワークみたいな。パソコンとにらめっこするお仕事です
シホ　すご。私パソコン苦手でさ、うちの事務系の仕事全部、スミレに任せっきりなのよ。
スミレ　パソコン得意。スマホも得意。ゲームも好き。
オカザキ　はいはーい！好きな、音楽とかは？
サヨコ　好きな音楽・・・あ、昔の洋楽とか好き。
モリシタ　・・・バグルス
サヨコ　え？
モリシタ　好き、だったよな
サヨコ　よく覚えてましたね
モリシタ　珍しかったから。女の子で古い洋楽好きって
サヨコ　そんなこと無いと思いますけど
シホ　そうよ。サクラも好きだったじゃない
サヨコ　あ、そうだったんですか
シホ　・・・あれ？
オカザキ　シホさん、どうしたんですか？
シホ　・・・なんでもない、ごめん

アラームの音。ミサト、起きる。

ミサト　よし、みんなおっはよ！ミサトちゃんふっかーつ！・・・あれ、どしたの？
モリシタ　いや、なんでもない。稽古始めようか
ミサト　おっけい、じゃあどっからいこうかな・・・あ、それじゃあ昨日の続きから！
シホとサヨコちゃんのシーン！
サヨコ　はい

シホ　　分かった

シホ、サヨコ中央に移動。

ミサト　そいじゃ、いきます

中央スポット。

サヨコ　『ねえ、なんで泣いてるの？』
シホ　『あなたは？』
サヨコ　『私は・・・あなたを、助けに来たの』
シホ　『・・・王子が、私を愛してくれないの』
サヨコ　『王子様が？』
シホ　『そう。王子は、私じゃなくて、他の女の人と結婚するの。でも、そんなの耐えられない。』
サヨコ　『・・・あなたは、人魚姫ね？』
シホ　『そうよ。私は人魚姫。ねえ、もう、苦しいのは嫌なの。ただ、王子に愛されたかっただけなの。お願い、私を助けて』
サヨコ　『・・・分かった、やってみる』

暗転。シホが去った後、明転。
サヨコ、台本を片手に練習。下手からスミレ、来る。

スミレ　あれ、まだ残るの？
サヨコ　うん、もうちょっとだけやってく
スミレ　そっか
サヨコ　・・・何食べてんの？
スミレ　コンソメパンチ。サヨコちゃんも食べる？
サヨコ　ううん、いいや。ありがと
スミレ　美味しいのに
サヨコ　・・・ねえ、スミレちゃん
スミレ　何？
サヨコ　いなくなっちゃった、主演の子のこと聞きたいんだけど、良い？
スミレ　え、うん、良いけど・・・突然だね
サヨコ　うん、まあ、役作りのためにも、どんなお芝居してたのか聞いておこうかなって

スミレ　なるほどね。そうだな、えっと・・・あ、名前は知ってる？
サヨコ　前に、ミサトさんにちらっと聞いた。水川、さくらさん
スミレ　そうそう。サクラさん、お芝居上手くてね。この公演、サクラさんのデビュー公演だったんだよね、ほんとは
サヨコ　え？てことはサクラさんって、今回が初めてってこと？
スミレ　うん。この劇団、元々は何年か前に、モリシタさんとシホさん、あとミサトさんが立ち上げたやつだったんだよね。けっこうメンバーの出入りがあったみたいなんだけど
サヨコ　うん
スミレ　で、2年くらい前に私が入って、そのあとすぐオカザキが入って、こないだサクラさんが入ったって感じ。まあ、デビュー前にいなくなっちゃったわけだけど。・・・あれ？
サヨコ　どうしたの？
スミレ　あ、ううん。・・・サヨコちゃんって、なんとなくサクラさんに似てるかもえ？
サヨコ　なんか・・・分かんないけど。オーラ？雰囲気？
スミレ　そうなの？ミサトさんにも、言われた
サヨコ　うーん、なんだろ。・・・あ、やば、もうこんな時間。そろそろ帰らないと。行こ
スミレ　うん

客席後方にスミレ、去る。サヨコ、去ろうとするが、一度舞台を振り返る。去る。
上手からサクラと男、出てくる。

男　君と彼女、似てるってさ
サクラ　当たり前じゃない。似てないわけが無いのよ
男　まあ、そうかもね
サクラ　ねえ
男　何？
サクラ　あの人は、何を考えているのかしら
男　さあ
サクラ　さあ、って
男　俺には分からないよ。いくら似てるって言ったって、結局俺はあいつじゃないんだから
サクラ　・・・それと同じで、あの子と私も、やっぱり違う人間なのね

上手にサクラ、男去る。サヨコ、スミレ、オカザキ出てくる。

サヨコ　『あ』
スミレ　『君は？』
サヨコ　『あなた、赤い靴の女の子！』
スミレ　『・・・よく知ってるね』
サヨコ　『ねえ、今すぐその靴、脱いだ方が良いわ』
スミレ　『そんなこと言われても、脱げないんだ』
サヨコ　『どうして？』
スミレ　『だってそれが、私のシナリオだから』
サヨコ　『あなたたち、シナリオシナリオって言うけど、自分でどうにか抵抗するとか出来ないの？』
オカザキ　『だから、最初に説明しただろ？登場人物じゃ、それは無理なんだって。誰かに作られた存在は、自力で何かを生み出したり変えたりする力がそもそもないんだ』
サヨコ　『なんかよくわかんないけど、大変なのね』
スミレ　『とにかく、私が靴を脱ぐには、君の力が必要なんだ。お願い』

シホ、ミサト、モリシタ出てくる。

ミサト　おっけー、じゃあ一旦休憩！
スミレ　オカザキぃ、コンビニいってポテチ買ってきて
オカザキ　嫌です
スミレ　えー、けち！
オカザキ　自分でいけ！
サヨコ　モリシタさん
モリシタ　何？
サヨコ　ここなんですけど、ちょっと相談が
モリシタ　・・・ああ、いいよ
サヨコ　あの
モリシタ　『・・・似てるんだ』
サヨコ　え？
モリシタ　『初めて見たときから。ずっと。』
サヨコ　・・・モリシタさん？
モリシタ　『僕の愛した、あの人に、君はよく似ている。』
サヨコ　あの・・・？

モリシタ　・・・って思ってるかな
サヨコ　え？
モリシタ　って思って、俺はここ、演じてる
サヨコ　あ、なるほど、ありがとうございます
モリシタ　いえいえ
ミサト　あ、サヨコちゃん、ちょっといいかな？
サヨコ　あ、はい

サヨコ、ミサトの方に行く。やがて出ていく。モリシタがその姿を見つめる。

モリシタ　そう、僕の愛した、あの人に。
スミレ　あれ、オカザキ、どこ行くの？
オカザキ　あ、ちょっと、コンビニ
スミレ　なんだいくんじゃん！じゃあポテチー
オカザキ　自分でいけって言ってんだろ！
シホ　一緒に行けば？
スミレ　うー、めんどくさいが仕方ない、一緒に行ってやろう、おごれ
オカザキ　なんでだよ！

オカザキ、スミレ出て行く。シホ、その様子をずっと見ている。

シホ　ねえ
モリシタ　ん？
シホ　サヨコちゃんは、サクラじゃないのよ
モリシタ　・・・分かってるよ、そんなこと
シホ　分かってないから言ってるんでしょう？
モリシタ　・・・
シホ　気を付けなよ。あの子にするって言い出したのは、あんたなんだから
モリシタ　・・・ああ

シホ、モリシタ、去る。オカザキ、スミレ、出てくる。

オカザキ　なあ、スミレ
スミレ　なーにー
オカザキ　おかしいと思わないか？
スミレ　何が？

オカザキ　・・・サヨコちゃん
スミレ　何の話？
オカザキ　なんていうか、さ
スミレ　うん
オカザキ　なんか、おかしい
スミレ　はあ？
オカザキ　いつもの話と違うんだ。決定的な、何かが
スミレ　何が言いたいの？
オカザキ　・・・やっぱいいや
スミレ　あ、ちょっとオカザキ！

オカザキ、スミレ、去る。サクラ出てくる。

サクラ　ゆっくりと物語は進んでゆく。ページをめくる度、見慣れた台詞が頭に浮かぶ。今、あそこにいるのは私じゃ無くて、あの子。あの子はきちんと、最後まで私を演じきれるのかしら？

男、出てくる。

男　有名な小説家ってさ
サクラ　うん
男　死んでから評価されたり、するだろ？
サクラ　昔の人に多いわね
男　だからさ、死ぬってことは、評価されることなんじゃないかって思うんだけど、どう？
サクラ　なんで私に聞くの
男　いや、君は何度も死んでるから、どうなのかなって思って
サクラ　・・・死んでから評価されたって、本人にとっちゃ何の意味も無いことよ。だって、死んでるんだもの
男　確かにそうだ
サクラ　ほら、行くわよ

上手にサクラ、男去る。シホ、出てくる。サヨコが来る。

サヨコ　あ、おはようございます
シホ　おはよう。早いのね

サヨコ　そうですかね？まあ、練習しないと、ぎりぎりだし
シホ　・・・そう

シホ、荷物を置き、台本を出す。

シホ　ねえ、昨日
サヨコ　はい？
シホ　昨日、モリシタくんと何話してたの？
サヨコ　昨日・・・ああ、アドバイスもらってたんです。どういう感情で主人公のことを見てるのかって
シホ　そっか。ちゃんと、参考になった？
サヨコ　あ、はい。
シホ　・・・なら、いいんだけど。ほんと、甘いのよ、あの人
サヨコ　甘い？
シホ　・・・３２ページ。
サヨコ　え？
シホ　『どうするつもり』
サヨコ　あ、っと
シホ　『あなたはここで、どうしたいの？』
サヨコ　えっと・・・
シホ　ほら、続けてよ。『もし、あなたが私達と違って、この話を変えたくないと思っているとしたら。』
サヨコ　『そしたら？』
シホ　『私はきっと、このナイフであなたを刺さなきゃいけない』
サヨコ　『・・・でも』
シホ　『分かってる。それじゃあ、結局エンディングは変わらない。最後にまた、泡になって消えてしまうだけ』
サヨコ　『もし、エンディングが変わって、王子様とあなたが結婚する未来が来たとする。でも、あなたは、それでいいの？』
シホ　『え？』
サヨコ　『だって、エンディングが変わってしまったら、あなたたちは永遠に、消えてしまうんでしょう？』
シホ　『どうして、それを？』
サヨコ　『二度ともう、同じ世界を繰り返さないために私はここに来たの。二度と繰り返さないってことは、そういうことでしょう？それで、あなたは幸せなの？』

シホ　『・・・いいの。あの人と幸せになれるなら、消えたって構わない』
サヨコ　『・・・そう』
シホ　・・・
サヨコ　シホさん？
シホ　あ、ごめん。・・・ねえ、サヨコちゃん
サヨコ　はい？
シホ　おとぎ話、好き？
サヨコ　好きですよ
シホ　私は、嫌いだったんだよね
サヨコ　え、そうなんですか？
シホ　自分とは別世界の話じゃない、あれって
サヨコ　だからこそ、なんですよ。自分とは違う世界の話だからこそ、憧れるんです。
シホ　憧れたって、私には変えられないの。シナリオの中で動いている以上は
サヨコ　シホさん？
シホ　自由に動ける人が、私は羨ましい。例えそれが、誰かの代わりでも、ね
サヨコ　・・・ちょっと飲み物、買ってきます

サヨコ去る。それをじっと見つめてから、シホ去る。
上手男、サクラ来る。

男　変えられない、ねえ・・・
サクラ　そうよ。変えようとしたって無駄。結局私達じゃ無理なのよ。私はただ、あの人と一緒にいたいだけなのに、どうして分かってくれないのかしら？
男　ねえ、あのさ
サクラ　何？
男　女の子ってのは、そんなに好きな人と添い遂げたいわけ？
サクラ　・・・何よ、突然ね
男　だって君は、あいつと一緒にいたいから終わらせたくないんだろう？
サクラ　そうよ
男　男からしたら、別にそこまでもないんだけど
サクラ　私は好きな人なら、地の果てまでもついて行くわよ
男　・・・ふうん
サクラ　ねえ、それよりまだなの？
男　そろそろだと思ってたんだけど・・・あ、いた
サクラ　それじゃあ、私ここで待ってるから
男　分かった、また後で

下手に男、去る。

サクラ　私は、あの子の代わり。あの人は、私の愛した、誰かの代わり。物語が入れ替わって、ぐるぐるぐるぐる頭を回る。今の世界じゃ、人魚姫も、ロミオも、赤い靴の少女もみーんな、きっと偽物ね。

サクラ、去る。

上手からサヨコ、来る。男、来る。

男　やあ、元気してた？
サヨコ　・・・何の用ですか
男　嫌だなあ。俺はただ、様子を見に来ただけだよ
サヨコ　見せるほどの何かはないので。それじゃあ
男　君がここにいる意味、分かってるよね？
サヨコ　・・・関係ないでしょ、あなたには
男　そんなことないよ。まあ、モリシタくんとも仲が良さそうで安心したよ
サヨコ　別に
男　俺にはこんなに冷たいのにね
サヨコ　うるさい
男　まあ、また様子、見に来るよ。じゃ。
サヨコ　・・・
男　あ、そうだ。君にひとつ、プレゼント。
サヨコ　何？
男　彼女、ポケットの中に入れっぱなしだったそうだよ。大事な大事な、小道具を、ね。

男、サヨコにバタフライナイフを手渡し、去る。

サヨコ、それを見送ってから、ポケットに入れる。オカザキ、来る。

オカザキ　サヨコちゃん？
サヨコ　あ、オカザキくん。おはよ
オカザキ　買い物？
サヨコ　うん、喉渇いちゃったから
オカザキ　さっきの人、知り合い？
サヨコ　・・・え？

オカザキ　ほら、さっきそこで話してたじゃん
サヨコ　・・・やだな。気のせいじゃない？わたし、誰とも話してないよえ？でも、いたじゃん。男の人。
オカザキ　いないよ、オカザキくん、寝惚けてるんじゃない？
サヨコ　そんなはず・・・あん？
オカザキ　サヨコちゃん、なんか落としたよ。・・・何、これ？
サヨコ　なんでもない。
オカザキ　・・・君は、何をしようとしているの？
サヨコ　・・・わたしは、救いたいだけ。あの人が終わらせたがってる、この世界を。
オカザキ　サヨコちゃん？
サヨコ　・・・行こう、オカザキくん
オカザキ　あ、うん

オカザキ、サヨコ、去る。
シホ、出てくる。モリシタ、来る。

モリシタ　はよ
シホ　おはよう
モリシタ　まだ誰も来てないのか？
シホ　・・・さっきまで、サヨコちゃんが
モリシタ　そうか
シホ　ねえ
モリシタ　何？
シホ　今回のあの子、なんか変よ
モリシタ　変？
シホ　いつもの、あの子とは違う
モリシタ　どういうことだ？
シホ　ねえ、何か知ってるんでしょ？
モリシタ　何の話だ
シホ　サヨコちゃんは、何者なの？
モリシタ　・・・

スミレ、ミサト入ってくる

スミレ　おはようございます

ミサト　おはよー
シホ　・・・おはよう
モリシタ　はよ

オカザキ、サヨコ、入ってくる。

サヨコ　おはようございます
オカザキ　・・・おはようございます
スミレ　はよっす
ミサト　よーしお前ら、きょうも元気かーい
スミレ　いえーい
オカザキ　・・・いえーい
ミサト　もっと腹から声出せー、お前らー、ぼちぼち始めるよ。良いかな？
サヨコ　はい
スミレ　やんないんかーい
ミサト　よし、じゃあ、モリシタくんとサヨコちゃんの掛け合いから。いきます

モリシタ、サヨコ中央。

モリシタ　『僕は、２人で生きられればそれでいい。ジュリエットと、２人で生きていきたいんだ。』
サヨコ　『それじゃあ、みんなの知ってるロミオとジュリエットのお話はなくなっちゃうってこと？』
モリシタ　『頼む。もう、嫌なんだ、死んでしまうのは。彼女と一緒に生きる道を、一緒に探してくれないか？』
サヨコ　『別にいいけど、私はどうすれば良いの？』
モリシタ　『君に、ジュリエットの代わりを演じて欲しいんだ』
サヨコ　『・・・わたしが、ジュリエット？』
モリシタ　『そう。君はジュリエットに、よく似ている。これならきっと、誰にも気付かれないはずだ。君ならきっと、この物語を変えられる。』
サヨコ　『でも、私、ヒロインの代わりなんて出来ないわ』
モリシタ　・・・大丈夫。君ならきっと、俺たちを助けることが出来る
サヨコ　・・・本当に、わたしに、出来るでしょうか
モリシタ　そのために、君はここにいるんだろう？

サヨコ、モリシタ去る。サクラ、男、出てくる。

男　果たして、彼女はヒロインなのか？
サクラ　何言ってるの。所詮あの子は私の代わり。本当のヒロインは私なんだから
男　そうだったね
サクラ　私はこのお話のエンディング、結構好きなんだけど。あの人はそうでもないみたいね
男　まあ、そうだろうね
サクラ　でもお話が終わってしまえば、私達は消えてしまう。そんなことになったら、二度とあの人とも会えなくなる。そんなの嫌だわ
男　・・・あの子も、そう思ってたのかな
サクラ　そうなんじゃない。だって私達は、結局あなたたちなんだから。

男、サクラ去る。サヨコ、モリシタ、シホ、スミレ、オカザキ出てくる。

オカザキ　『そんなの、君が決めてしまえば良いじゃ無いか』
サヨコ　『でも、私じゃ駄目よ。みんなが望むエンディングじゃ無きゃ』
オカザキ　『終われれば別に何でもいいんだよ。』
サヨコ　『それじゃ困るわ』
スミレ　『私は、足を切り落とされなければなんでもいいや』
シホ　『私は、王子に愛して欲しい。あの子じゃなくて、私を』
モリシタ　『僕も、ジュリエットと2人で生きていきたい。もう、苦しむのは嫌なんだ』
サヨコ　『ほら、願っている終わらせ方じゃなきゃ、きっとまた繰り返してしまうわ』
ミサト　そこまで

明転。ミサトが出てくる。

ミサト　ねえ、サヨコちゃん
サヨコ　はい？
ミサト　あのさ、聞きたいんだけど
サヨコ　はい
ミサト　・・・サヨコちゃんは、なんでここにいるの？
サヨコ　え？
スミレ　ミサトさん、どうしたんですか？
ミサト　サヨコちゃんは、どうしてここにいるの？
サヨコ　言ってる意味がよく、分からないんですけど
ミサト　サヨコちゃんがここにいる理由だよ

サヨコ　理由って、モリシタさんに呼ばれて
ミサト　そうじゃなくって。どうして、このシナリオの中にいるの？
オカザキ　何言ってるんですか
ミサト　サヨコちゃんは、このシナリオの登場人物じゃない。そうだよね？
シホ　・・・どういうこと？
ミサト　ねえ、分かってるんでしょ？最初から全部。ここは、誰かが書いた本の世界だって言うこと。
スミレ　ミサトさん
モリシタ　・・・そして、俺たちはその世界で生きている。本を開かれている間だけ、その世界で動くことを許される。
ミサト　いつもなら私達は、何度も何度も、同じ会話を続けて、始まりから終わりまで、何度も同じシナリオを辿ってるはずなの。でも今回は違う。違うの。いつもと違う会話を、私はしてるの。
スミレ　もしかして、オカザキが言ってた違和感って、このこと？
オカザキ　そうかもしれない
サヨコ　・・・
モリシタ　君は、誰なんだ？
サヨコ　え？
モリシタ　君はいったい、どこまでこの話を知っている？
シホ　本当のことを教えて。サヨコちゃん
サヨコ　・・・主人公のサクラは、主演が消えてしまった劇団で、その子の代わりに主演ををすることになる。消えた子によく似たサクラに、モリシタさんは恋をしてしまう。でも、消えた主演の子は、モリシタさんの恋人だった。２人の間で揺れるモリシタさんを見て、苦しんだ末にサクラは自殺。後を追って、モリシタさんも自殺して、このお話は終わりです
オカザキ　・・・どうして
ミサト　ねえ、サヨコちゃん、あなたはいったい・・・？
サヨコ　・・・わたしは、この話を終わらせるために、ここに来ました。ミサトさんの言うとおり、わたしはこのシナリオの登場人物じゃありません。わたしは彼女の、水川さくらの代わりなんです・・・教えてください、モリシタさん。あなたが苦しまない、この物語のエンディングは、なんですか？

ミサト、モリシタ、シホ、オカザキ、スミレ去る。
サヨコ下手。上手にサクラが来る。

サヨコ　幼い頃から、おとぎ話が好きだった。

サクラ　ひらひらのドレス。
サヨコ　輝くシャンデリア。
サクラ　森の中の、お菓子の家。
サヨコ　素敵な王子様。
サクラ　ずっとずっと、憧れていた。
サヨコ　ずっとずっと、わたしもそんな風になりたかった。
サクラ　私は、そんな彼女が生んだ、物語の主人公。
サヨコ　わたしは、自由に物語を描くことの楽しさを知った。
サクラ　私は、彼女の物語の中で、生きていた。
サヨコ　でも、わたしの物語は、悲劇が多かった。
サクラ　わたしの話もそう、悲劇だった。
サヨコ　主人公のサクラと、その相手のモリシタさんが死んでしまう話。
サクラ　想い合った末の死なんて、まるでロミオとジュリエットみたいじゃない？彼を愛していたから、繰り返すことは苦しくなんて無かった。
サヨコ　でも、彼がその世界を変えたいと言い出した。
サクラ　私はただ、彼と一緒にいたいだけなのに。
サヨコ　物語が読まれる度、同じ苦しみを味わうのは嫌だと。
サクラ　ねえ、そんなに終わらせたいの？
サヨコ　そのためにわたしは、あなたの代わりにここに来た。
サクラ　どうして？好きな人と一緒にいたいって、あなたは思わないの？
サヨコ　だってわたしが、このお話を書いたんだから。
サクラ　あなたなら、私の気持ちを分かってくれると思ってたんだけど。
サヨコ　分かるわよ。だって、わたしの想いは叶わなかったんだから
サクラ　だったら尚更じゃない。ずっと一緒にいたかったんでしょ？あの人と。
サヨコ　だからよ。好きな人だからこそ、もうわたしのことで苦しめるのは、嫌なの。
サクラ　無駄よ。きっともう、物語は変わらない。

サクラ、去る。男、来る。

男　ねえ
サヨコ　・・・何？
男　ジュリエットの最後の死に方、知ってる？
サヨコ　ロミオの死がショックで、短剣を胸に突き刺して、自殺。それをモチーフにしたの。あの話は
男　だよね。赤い靴の少女は、足を斧で切り落とされた。じゃあ人魚姫は？
サヨコ　泡になった。

男　泡になる前、彼女の姉が、王子の胸を刺すために彼女に渡したのは？

サヨコ　ナイフ。

男　そう。そして俺がこの前、君に渡したのは？

サヨコ　・・・バタフライナイフ

男　そう。もし、君が物語をモリシタくんのために終わらせるなら。これは有効な手段だと思うけど？

サヨコ　・・・そうね

サヨコ去る。

男　モリシタくんのために、ね

男去る。

モリシタ　彼女が目の前で死ぬのを初めて見たとき、絶望、という感情しか無かった。後を追うシナリオなのは分かっていた。でも、頭の中が真っ白になって、何も考えること無く自分の胸にナイフを突き刺していた。どうして、そんなシナリオを彼女が書いたのかは分からない。ただ、ひたすらに何度も繰り返すうちに、嫌になった。だから彼女に切り出したんだ。物語を終わらせたい、と。

モリシタ、傘をさす。サクラ、中に入る。

サクラ　・・・え?どういうこと?

モリシタ　もう、嫌なんだ。君が死ぬのを目の前で見るのは

サクラ　でも、そんなことしたら私達、消えちゃうのよ?

モリシタ　それでも俺はもう、耐えられないんだ

サクラ　・・・私は、あなたと二度と会えなくなる方が嫌。

モリシタ　サクラ

サクラ　だって、消えてしまえば終わりなのよ?夢みたいなキラキラした世界も、綺麗な衣装も、素敵な恋の物語も、全部全部消えてしまうのよ?何も無くなってしまうなんて、私には耐えられない。どうして分かってくれないの?

モリシタ　君だって、俺がどれだけ苦しんでいるのか分かってないじゃないか。目の前で何度も君が死ぬ。もう一度本が開かれれば君は生き返る。でも、始まる度君がまた、目の前で死ぬ時が来る。もう、嫌なんだ

サクラ　・・・もういい

サクラ、悲しそうな顔をして去る。

モリシタ　雨の中走り去る彼女を、追いかけることは出来なかった。その時、君が現れたんだ。

サヨコ　・・・あれ、モリシタさん

モリシタ　・・・サヨコちゃん

サヨコ　明日、いよいよ本番ですね

モリシタ　・・・そうだな

サヨコ　いいですか、エンディングは明日です

モリシタ　分かってる

サヨコ　モリシタさん。本来なら、ここにはいま、サクラがいます

モリシタ　・・・うん

サヨコ　でも今は、サクラじゃなくて、わたしがいます

モリシタ　・・・サヨコちゃん

サヨコ　だから何も、心配しないでください

モリシタ　・・・ありがとう

サヨコ　なにがなんでも、終わらせます。いいですか？

モリシタ　・・・ああ

サヨコ　それじゃ、また明日

サヨコ、去る。

モリシタ　・・・サヨコちゃん、君は何故、サクラを自殺させたんだ？

男、出てくる。ぶつかる

男　あ、すみません

モリシタ　いえ

男　あの・・・あなたは、愛していましたか？

モリシタ　え？

男　彼女のこと。俺じゃ出来なかったから

モリシタ　もちろん好きでした。あなたがサヨコちゃんを想っているくらい。

男　・・・そうですか

男、モリシタ去る。サクラ、来る。サヨコも来る。

サクラ　あら、来たのね
サヨコ　・・・なんでいるのよ
サクラ　フィナーレには、ヒロインが必要でしょう？
サヨコ　今、そのヒロインなのはわたしよ
サクラ　状況が変わったの。あなたに最後までやらせてあげても良かったんだけど、話を終わらせられると困っちゃうから
サヨコ　どうして分からないの？モリシタさんの苦しみが
サクラ　そっちこそ、どうして分からないの？私は彼と一緒にいたいだけだって言ってるじゃない
サヨコ　それじゃ駄目なの、分からない？

モリシタ、シホ、オカザキ、スミレ、ミサト入ってくる。

モリシタ　・・・サクラ
サクラ　モリシタくん
モリシタ　サクラ、もうやめよう
サクラ　なんで？
ミサト　サクラちゃん、もう死なないで。お願い
サクラ　ミサトさん
シホ　あなたが死んだら、また話が続いてしまう。モリシタくんは2人のためにも、終わらせようとしてるの
サクラ　終わらせたって、私にはなんの良いことも無いんだもの
オカザキ　サクラさん・・・
サクラ　終わらせる必要なんて無いの。だって私達は、同じシナリオを辿るために生まれてきたんだから
スミレ　・・・でも
サクラ　だってそうじゃない。私達はこの子にに作られた存在。だったらそのシナリオを辿り続けるのが私達の務めじゃない？
サヨコ　・・・だからよ。だから、わたしが終わらせに来たの。
サクラ　そんなの、無理よ

サクラ、バタフライナイフを取り出し、自分に向ける

モリシタ　やめろ、サクラ・・・！
サクラ　嫌よ。ここで死ねば、話は続く

シホ　でも、モリシタくんはもう死なないかもしれない
サクラ　どうして？
シホ　どうして、って、あなたが死んだ後、モリシタくんには自殺しないっていう選択肢があるの
サクラ　そんなこと出来る訳ない
スミレ　なんでですか？
サクラ　彼が私を愛してるからよ。後を追わないなんて考えられないわ
サヨコ　待って
サクラ　何よ
サヨコ　今は、わたしがあなたの代わりなのよ
サクラ　それがどうしたの？
サヨコ　つまり、わたしが死んで、モリシタさんが自殺すれば物語は続く。でもわたしがここで死ななければ、物語は終わるの
サクラ　・・・そんなの
サヨコ　わたしは死なない。この物語は、わたしが終わらせる

サヨコ以外、動きを止める。男、開いた本を持って出てくる

男　ねえ
サヨコ　何？
男　最後にひとつ、聞いても良いかな
サヨコ　良いけど
男　君はさ、どうして2人が死んでしまうエンドになんてしたの？
サヨコ　・・・サクラは、あなたに言ったでしょ？
男　何を？
サヨコ　好きな人なら、地の果てまでもついて行く、って
男　言ってたね、そんなこと
サヨコ　そういうこと
男　どういうこと？
サヨコ　これ、もういらないから返す。それじゃあね

サヨコ、バタフライナイフを男に渡す。
サヨコ去る。

男　人は毎日を繰り返す。何度も何度も、やめたいと思っても、毎日は繰り返す。
それは僕らがこの世界で生き続ける限り終わらない。結局彼らは、物語を終

えることは出来たのだろうか？それは誰にも分からない。でも、僕の話はここでお終い。もう、彼女と会うことは二度と無いだろう。・・・さよなら、僕の愛した、

男、本を閉じ、去る。

～fin～